

静かな湖畔の森の影すら

鷹司秀のキャンピングカーが爆発した。

あらゆる場所を拉致監禁用にカスタムした、特別性の輸入車だ。

出かける時にはぴかぴかに磨き上げられていた水色の車体が、炎に包まれている。

私たちが湖畔で、バーベキューをしている時のことだった。

鷹司家の私有地であるらしい、どこかの森奥。

そこにある湖のそばで、私たちはすでに二日ほど過ごしていた。

駐車場と言うには少々野趣を帯びた、砂利の敷かれた広場で車が轟々と燃え盛っている。

ただごとではない轟音を聞いて駆けつけた鷹司秀が、腕の中の私の目をじっと見た。

首を横に振って、それに答える。

前科は一回だけなので、真っ先に疑うのはやめてほしい。

「僕らが乗っていない時にこうなったのは、不幸中の幸いかな」

その言葉には同意する。

「危ないから、離れてようね」

離れても何も、鷹司秀に抱かれているので私に移動する方法はないのだが。

角度を変えて炎上する車を眺めると、その傍らに横たわった猪がいるのが見えた。

車と共に炎上を続けているので、多分あの猪がぶつかった衝撃か何かが原因なんだろう。

自然は恐ろしい。

「熊はいないって聞いてたんだけど、猪とはね」

猪も十分脅威なので、そんな場所にレジャーで来とうなかった。

ちなみにレジャーだと思っているのは鷹司秀だけだし、私にとっては単に地獄自然編だ。

鷹司秀は一通り確認を終えると、私を連れて湖畔へと戻る。

キャンピング用に張ったテントの中に私を置いて一つ領くと、キャンピングカーの方にまた歩いて行った。

スマートフォンを耳につけ何事かを喋っているが、多分身内に救助を要請しているんだろう。

ここにはろくな交通手段がないので、こうなってしまった以上誰かに迎えにきてもらうしかない。

移動時間はそれほど長くなかったので、数時間もすれば黒服の男たちが外車で迎えに来るだろう。

急な爆発にうつかりしたらしい鷹司秀は、色々と道具を置いて離れている。

いつもの奴なら、絶対にしないミスだ。

愛車が爆発すると、流石の鷹司秀でも動揺するらしい。

火がついたままのバーベキューコンロ、トング、ライター。

それから――無骨で小さい、アウトドア用のナイフ。

「ただいま、すぐに迎えが来てくれるってさ……どうしてナイフを持つてるの？これは危ないから触っちゃダメって、言ったよね？」

勝手に刃物に触れたことを咎めて、鷹司秀の声が低くなる。

しかし、そんなことで今更怯みはしない。

私は声も震わすことなく、服を脱ぐように要求した。

「えっ」

鷹司秀が、目を見開いた。

それからみるみる間に、頬や耳を紅潮させていく。

「そんな、急に大胆な……でも、いいよ。君の望みなら。どうやって脱ぐか、リクエストはある？」

ゆっくりいやらしくとか、一息に大胆にとか例を出されたので、とりあえず後者を求めた。

いいからさっさと脱げ。

鷹司秀の母親は、彼同様の感性を持つ父親に監禁され弱って死んだ。

その悲劇を見て育った鷹司秀は、私をどうにか監禁した状態で長生きさせようと考えた結果、定期的に人間のいない自然の中で過ごさせることにしたらしい。

日光を当てていれば健康になるだろうなどという、雑過ぎる改善策に文句は何度もつけたものの、結局今日まで鷹司秀がそれを受け入れる気配はなかった。

どう考えても母親の死因はストレスだったのだが、自分たちの愛情が毒になってることには少しも思い至らないのだ。

より沢山日光を当てれば健康になるだろう、あと見てて嬉しいし。

そんな馬鹿の発想により、現在の私は全裸だ。

逃げるには、服が必要だ。

完全に誤解している鷹司秀が脱いだシャツを、私はナイフを手放さないままに着る。体格差があるせいで、若干ワンプースみたいになっているがむしろ都合がいい。

「彼シャツ……！」

片手で口を覆って感嘆する鷹司秀の隙について、私は背後の森へ駆け出した。ライターとナイフがあれば、サバイバルもなんとかなる。そう信じて。

後日、大規模な山狩りで野生化した私が回収されるのはまた別の話である。